

Alphonse Mucha MuseumNews

堺 アルフォンス・ミュシャ館 (堺市立文化館)



アルフォンス・ミュシャ
《夢想》1898年
リトグラフ、紙

Contents

vol. 5

展示報告 (2015年4月 — 2016年3月)

作品紹介

イベントレポート

作品修復報告

ミュシャ館インフォメーション

ミュシャの花冠—芸術と民族への想い—

2015年4月7日(火)ー2015年7月5日(日)

…芸術はその民族という土壌から芽生え、それ自体の根で成長し、その国という樹液によって葉を繁らせ、それ自体の花を咲かせる。他の諸国の花々と一緒にひとつの共通の花冠にからみつけられるために。独創的であればある程、それぞれの花はより美しくなり、花冠全体はより美しく価値あるものとなる。

(ジリ・ミュシャ『アルフォンス・マリア・ミュシャー生涯と芸術』より)

ミュシャは国や民族に対して確固たる自身の考えを持ち、作品制作に取り組んでいました。本展覧会では、84点の作品とともにミュシャの芸術や民族に対する考え方を紐解きました。

第1章では、ミュシャがどのような人々に芸術を届けたいと考えていたのか、その考えに焦点を当てました。ミュシャの作品にはカレンダーや絵葉書、メニューといった人々の日常生活に付随し、身近に流通するものが数多く存在します。また、装飾パネルなどの安価な観賞用版画もさまざまな種類が制作されました。ミュシャは限られた裕福な人々だけでなく、一点物の高価な肖像画や歴史画には縁のなかった一般の人々にも芸術を楽しんでもらいたいという考えを持っていたのです。

第2章では、ミュシャ作品と自然についてご紹介しました。ミュシャの作品にはユリやバラ、ヒナギクなどの花をはじめとした植物が数多く登場します。それらは写実的な画風で描かれたり、デフォルメされて装飾に使用されたりと多彩な顔を私たちに見せてくれます。自然を



よく研究し、そこからインスピレーションを得て独自のものにすることが芸術家にとって大切だというのがミュシャの考えであり、後進の指導の際にもこの考えを伝えていたようです。

第3章では、「芸術」に対するミュシャの考え方に触れました。ポスターの分野で一躍有名になったミュシャにとっては、そういった商品売り込むための芸術も芸術であることには変わりありませんでした。しかし、宗教や神話を題材とした歴史画のように格調高い絵画を描く画家を目指していたミュシャにとって、2つの芸術は区別すべきものだったようです。

第4章は、ミュシャの強い愛国心と同胞への想いを、祖国チェコのために描かれた作品を通して感じていただく章としました。切手や紙幣のデザインなど祖国のための仕事を中心にご覧いただき、その並々ならぬ想いをご紹介しました。また最晩年のミュシャの思想からは、祖国や同胞への愛にとどまらず人類愛の域に到達するような豊かな愛を感じ取ることができます。ミュシャはそれぞれの国や民族独自の文化を大切に、世界中の芸術が美しく花咲くよう願っていたのです。(M.I.)

ミュシャと世紀末の幻想

2015年7月11日(土)ー2015年11月8日(日)

ミュシャが活躍した19世紀末のフランスには、「良き時代」とされたベル・エポックの華やかな一面とは裏腹に、退廃的で仄暗い一面も存在します。本展覧会では、そんな世紀末独特の時好とミュシャとの関わりを関連する69点の作品を通してご紹介し、華やかで美しいだけではないミュシャ作品の意外な一面を覗いていただきました。

第1章では、世紀末の光の部分ともいえる「ベル・エポック(良き時代)」についてご紹介しました。産業革命による技術革新や資本主義の発達が影響し、到来した大量生産・大量消費の時代において、商品の購買意欲をか

きたてるポスターの需要はどんどん高まってゆきました。女優サラ・ベルナールのポスターが好評を博したミュシャもまた多くの注文を受けてパリの街を彩る華やかなデザインを生み出すこととなります。

第2章では、当時の退廃的な空気や世紀末独特の流行とミュシャとの関わりについて、第1章とは正反対の闇の部分として示しました。宝飾品や花々に囲まれた優美な女性像を描くイメージの強いミュシャですが、実は心霊研究などオカルトの分野に強い関心を抱き、友人たちとともに自らのアトリエで降霊術の実験を行うこともありました。また、19世紀末の文学や絵画作品に頻繁に登場する「ファム・ファタル(宿命の女)」のモチーフなど、当時の世相を反映したものも作品の中に登場します。世紀末の闇の部分は多くの芸術家の創作の源泉となっており、ミュシャもまたそこからインスピレーションを得た

芸術家の一人だったのです。

第3章では、19世紀後半に印象主義と並んで重要な潮流であった象徴主義とその影響についてご紹介しました。目に映る自然や光の変化を観察し、ありのままを画面に表現した印象主義に対して象徴主義は、目に見えない画家の思想や夢の世界を描き出そうとするなど、現実世界の再現以上の意味を絵画に持たせようとします。象徴主義に関係する画家との交流により、その思想に触れることもあったのでしょうか。ミュシャの作品にも、世紀末のパリとの関わりによって生まれた神秘的・幻想的な作品が存在します。

第4章では、新しい世紀を迎えたパリを彩った作品たちを展示しました。1900年のパリ万国博覧会で最盛期

を迎えたアール・ヌーヴォーは徐々に衰退を迎えます。そして1910年頃から、直線的で幾何学的な表現が特徴のアール・デコという美術様式が起るなど新しい表現が次々と生まれてゆきました。しかし変化が訪れたのはパリの街だけではありません。アール・ヌーヴォーの旗手であったミュシャもまた、祖国のための制作に残りの人生を捧げることを決意し、新たな挑戦への第一歩を踏み出すのです。(M.I.)



ミュシャが旅した世界

2015年11月14日(土) - 2016年3月6日(日)

アール・ヌーヴォーの代表的な芸術家としてパリでの活躍が良く知られているミュシャですが、実は生涯にわたりさまざまな土地で創作活動を行っています。本展覧会では、ミュシャが長期間滞在し、作品を制作したフランス、アメリカ、チェコを中心にミュシャが訪れた地とそこで生まれた作品74点をご紹介します。

第0章では導入として、旅行や鉄道など「旅」のテーマに合ったポスターを展示しました。19世紀末になると中産階級の台頭などにより、リゾート地への旅行を楽しむ人々が現れるようになります。それにともない、旅行や鉄道に関するポスターも数多く制作されるようになりました。

第1章ではパリでのミュシャの活躍についてご覧いただきました。祖国を離れパリの美術アカデミーで技術を磨く日々を送っていたミュシャでしたが、チェコの都市ミクロフの大地主であるクーエン＝ペラシ伯爵から受けていた学業の資金援助が突如打ち切られてしまいます。その後は生計を立てるために雑誌や書籍の挿絵を描く仕事を始め、児童向けの小説から歴史的題材を扱う書物まで幅広く挿絵を手がけました。そうした生活を続けること約5年、女優サラ・ベルナールの演劇を宣伝するポスターを手がけるという大きな転機が訪れました。その作品により、一躍有名人となったミュシャのもとには次々とデザインの仕事が舞い込み、精妙な描写が印象的なポスターなど、多くの作品がパリの街でうまれました。

第2章ではアメリカでの活動をご紹介します。その生涯の中で何度かアメリカを訪れたミュシャは、雑誌の表紙やアメリカの女優たちのポスターを手がけるなど、パリに滞在していた時と同じように商業的なデザイン

の仕事をお願いしました。一方で本格的な油彩画への着手や若い芸術家たちの育成など、多岐にわたる活動を行いました。

第3章ではミュシャが長期にわたって滞在したパリや、たびたび訪問したアメリカ以外で訪れた場所に関連する作品を展示しました。パリの美術アカデミーに入学する前にはウィーンの舞台装置工房で働いたり、ミュンヘンに留学して絵画の技術を学んだり、後の制作につながる技術を培います。またミュシャは歴史画を描く際、題材となる時代の道具や衣服を精査して画面上に反映させるべきと考えていたため、モデルとなる地を実際に訪れて、その土地の人々や文化に触れていました。各地での経験やさまざまな人々との出会いは、ミュシャの創作活動の大きな糧となっています。

第4章は祖国チェコでの制作についてご紹介する章としました。無事《スラヴ叙事詩》制作のための資金援助の約束を取り付けたミュシャは祖国に戻り、西ボヘミア地方に位置するズビロフ城を住居兼アトリエとして借用、制作に集中できる環境を手に入れます。それから長い年月を費やし、全20点からなる大作《スラヴ叙事詩》を完成させました。非常に愛国心の強かったミュシャは晩年の制作活動のほとんどを祖国のために捧げ、その地で人生という旅を終えました。旅の終着点であった祖国チェコで制作された作品には、祖国と同胞への強い想いが込められているのです。(Y.K.)



《夢想》

1898年 リトグラフ、紙 715×538mm

曲 線的な装飾や花に囲まれた美しい女性という典型的な「ミュシャ・スタイル」といえる作品で、いくつかのヴァリエーションがある人気作である。もともとは印刷会社シャンプノワのポスターとして制作されたため、描かれた女性が持っているのは印刷物の見本帳のようなものであると考えられる。

シャンプノワのポスターとして使用されていたものは、女性の頭上の装飾の中に社名や住所などの文字情報が記載されていたようである。その後、文字情報の部分や装飾の細部を変更し、様々な用途で使用されている。(M.I.)



《レスリー・カーター》

1908年 リトグラフ、紙 2130×791mm

ア メリカの女優レスリー・カーターの演劇「カッサ」のためにデザインされたポスター。ポスターのタイトルからは抜け落ちているが、本来のステージ・ネームは「レスリー・カーター夫人」である。夫であるレスリー・カーターとは結婚して9年後に離婚している。彼女はかつてミュシャがサラ・ベルナルのために制作したポスターに憧れ、彼に作品の制作を依頼した。またポスターだけでなく、衣装や舞台装置など、多くのデザインがミュシャに依頼された。物語の舞台はハンガリーで、主人公のカッサは王子の子どもを身ごもるが、彼に捨てられて発狂するという筋書きである。サラ・ベルナルのポスターと同じく縦長の画面に描かれたカッサは青ざめた顔をしており、不気味な印象を抱かせる。この演劇は巨額の費用が投資された一大プロジェクトであったが失敗に終わり、再演されることはなかった。(M.I.)



《ロシア復興》

1922年 リトグラフ、紙 795×470mm

I 917年のポリシェヴィキによる革命後、内戦によりロシアは混乱し、ウクライナとベラルーシを筆頭に飢饉に見舞われた。本作は飢饉の犠牲となった子どもたちの支援を目的として制作されたポスターであり、作品の下部には「ロシアは復興しなければならない」という意味のラテン語が書かれている。犠牲になった子どもを抱きかかえて悲しみに暮れる母親のまなざしは、訴えかけるかのようにまっすぐこちらを見つめている。華やかな装飾と美しい色彩で知られるミュシャのポスターの中でも、暗く落ち着いた色調と暗然たる雰囲気が異彩を放つ作品である。(Y.K.)



リニューアルオープン記念イベント「ミュージアムコンサート～大阪交響楽団メンバーによる弦楽四重奏～」

2015年4月26日(日) 14:00～15:00

与 謝野晶子文芸館の「さかい利品の杜」への移設にともない、平成27年4月7日にリニューアルオープンした堺 アルフォンス・ミュシャ館。リニューアルオープン記念イベントとして、ミュージアムコンサートを開催しました。A・ドヴォルザークの『アメリカ』など、ミュシャの生まれ故郷チェコに関連のある楽曲を大阪交響楽団メンバーによる弦楽四重奏で演奏していただきました。



会場は演奏を心待ちにする参加者のみなさまで満員となり、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが織りなす音色にうっとりとしき入る姿が印象的でした。演奏が終了すると会場外まで響く大きな拍手が沸き起こり、その余韻のままに展示室へ足を運ばれる参加者の方も見受けられました。音楽という普段とは違った方面から、新たなミュシャ館を楽しんでいただくことができたのではないのでしょうか。(M.I.)



関西大学と堺市の地域連携事業関連イベント 小企画展示「想いの軌跡—それから」解説ツアー

2016年1月11日(月・祝) 11:00～、14:00～、15:30～(各回15分程度)

三 ユシャ館3階展示室では2015年11月14日～2016年3月6日まで、関西大学と堺市の地域連携事業として小企画展示「想いの軌跡—それから」を開催しました。展示の内容は、現在プラハ市立美術館が所蔵する《スラヴ叙事詩》全20点をパネルにて展示し、パリを去ったムハ（ミュシャ）の「それから」の活動を紹介するといったもの。この展示の企画を担当された兵庫県立美術館所属の新谷式子さんをお招きし、参加者とともに展示室をまわりながら解説をするツアーを実施していただきました。

全3回の解説ツアーはどの回も定員以上の参加希望をいただきました。《スラヴ叙事詩》をはじめとした難しい主題の多い展示に最初こそ緊張気味の方も多かったのですが、新谷さんの軽妙なトークに笑い声がこぼれ次第に質問が飛び交うようになりました。講演会ではなく解説ツアーという形態が「参加しやすい」とのご意見もあり、このツアーがミュシャのあまり知られていない一面に触れていただくきっかけとなったのではないかと思います。(M.I.)



2015年度

作 品 名	制作年	技法・材質	修復後寸法 (タテ×ヨコ)	処 置 内 容	委 託 先
ロレンザッチオ	1896年	リトグラフ、紙	2072×760	乾式清掃、裏打ちの除去、全体水洗、裂けの繕い、再裏打ちと作品固定、額・アクリルパネル新調	山傾絵画修復工房
書籍『白い象の伝説』(第1章)挿絵(下絵)	1893年	墨、水彩、紙	348×306	乾式清掃、破れの接合・折れの補強、ドライプレス、マット・アクリル・裏板新調	山傾絵画修復工房
《ハーモニー》の習作	1908年	パステル、紙	836×1607	本紙損傷部の繕い、窓マット・グレーシング・裏板の交換	ConRes工房
ハーモニー 他9点	—	—	—	作品保存に適した額装への改善(中性紙ハニカムボードへの作品の張込み、グレーシングの交換、ドロアシの装着、裏板の交換など)	ConRes工房

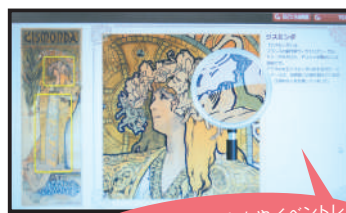
※作品寸法の単位はmm。

！「堺 アルフォンス・ミュシャ館 (堺市立文化館)」としてリニューアルオープン

2015年2月まで併設されておりました「与謝野品子文芸館」の「さかい利品の杜」への移設にともなう休館を経て、同年4月7日にリニューアルオープンした「堺 アルフォンス・ミュシャ館 (堺市立文化館)」。4階展示室では従来通り、年に3回ほどミュシャに関する企画展を開催しています。そして文芸館跡の3階は、アール・ヌーヴォー調の家具やミュシャ作品の複製画を展示するなど、ミュシャとその作品の世界をより身近に感じられる空間として生まれ変わりました。また、ミュシャや彼の祖国であるチェコに関する書籍、堺市所蔵作品のデータベースの閲覧といった、情報コーナーとしての役割も担っています。(M.I.)

3階展示室 堺市所蔵作品データベース閲覧用デジタルコンテンツのみどころ

- ①人気のミュシャ作品を細部まで観察できる「見どころ虫眼鏡」
- ②ミュシャが挿絵を描いた本や『装飾資料集』の中身が閲覧できる「ミュシャの本」
- ③ミュシャ作品の飾り枠や女性、植物を組み合わせ遊べる「ミュシャのパーツで遊んでみよう」

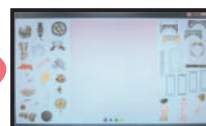


①

他にも次回展のご案内やイベントレポートなどがご覧いただけます。ご来館の際はぜひ遊んでみてください！



②



③

！リニューアルオープン記念イベント

リニューアルオープン記念イベントとして、ミュシャ館と堺市が連携し3つのイベントを開催しました。2015年4月26日開催の「ミュージアムコンサート〜大阪交響楽団メンバーによる弦楽四重奏〜」(p5参照)を皮切りに、5月10日には画家の小瀬一紀さんによる講演会「芸術と民族への想い」が開催され、多くの参加者がその講話に熱心に耳を傾けました。また、5月30日には堺シティオペラ出演の「リニューアルオープン記念コンサート」が催され、奏でられる美しい音色に、会場は高揚した雰囲気になりました。たいへん多くの方々にご応募・ご参加いただき、誠にありがとうございました。(M.I.)



！公式フェイスブック開設

ミュシャ館公式フェイスブックを開設いたしました。これまで以上に広くミュシャ館を普及できるよう、随時情報を発信して参ります。展覧会情報、イベント情報はもちろん、日々のミュシャ館に関連すること、ちょっとした裏側など...をお知らせいたします。当館ホームページにあるフェイスブックのバナーや上のQRコードからぜひご覧ください。投稿に関するコメントもぜひお待ちしております。(N.N.)



！箱根ラリック美術館 開館10周年記念企画展「ミュシャとラリック」 新居浜市美術館 開館記念展「新居浜―日本 回想の新居浜美術」

2015年、堺市は2つの展覧会に作品を出品致しました。まず4月25日〜12月13日に箱根ラリック美術館で開催された開館10周年記念企画展「ミュシャとラリック」には《ラ・ナチュール》など37点を出品、ミュシャと同時代に活躍した芸術家ルネ・ラリックの作品とともに展示されました。

そして11月3日〜12月20日まで開催された新居浜市美術館

の開館記念展「新居浜―日本 回想の新居浜美術」には《ジョブ(1898年)》を出品し、新居浜ゆかりの画家に関連する作品として新しい美術館の壁面を彩りました。関西圏以外の方々にも、堺市が所蔵するミュシャ作品の魅力を知っていただける機会となったのではないのでしょうか。(M.I.)

堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

観覧料	一般 500円	高校・大学生 300円	小・中学生 100円
	*小学生未満・65歳以上・障がい者手帳をお持ちの方と介助者は無料 *20人以上100人未満の団体は2割引		
開館時間	9時30分〜17時15分(入館は16時30分まで)		
休館日	月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館) 年末年始、展示替期間、2017年2月6日〜6月30日(館の設備改修工事)		
交通	JR阪和線「堺市」駅下車徒歩約3分 JR快速にて・大阪から約27分・天王寺から約8分・和歌山から約1時間4分・関西国際空港から約41分		

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺式番館
TEL:072-222-5533 FAX:072-222-6833
http://muchasakai-bunshin.com

